

# ユニバーサルファッションの設計・デザインに関する開発研究

Development studies on a design of universal fashion

大網 美代子<sup>1</sup>, 小川 雄司<sup>2</sup>, 武田 幸<sup>3</sup>, 竹内 梓<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学家政学部, <sup>2</sup>埼玉県総合リハビリテーションセンター, <sup>3</sup>エルデール

Miyoko Oami<sup>1</sup>, Yuji Ogawa<sup>2</sup>, Sachi Takeda<sup>3</sup>, and Azusa Takeuchi<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Department of Clothing and Textiles, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

<sup>2</sup>Saitama Prefecture Synthetic Rehabilitation Center

148-1 Nishikaizuka, Ageo-shi, Saitama, Japan 362-8567

<sup>3</sup>holder

5-32-18 Taishidou, Setagaya-ku, Tokyo, Japan 154-0004

キーワード：ユニバーサルファッション，デザイン，機能美，教育効果

Key words : Universal fashion, Design, Function beauty, Educational effect

## 抄録

現在、流行により目まぐるしく消費される衣服がある一方、身体に障害のある人が欲しい衣服が手に入らないアパレル業界での現状が挙げられる。本稿は、身体障害に対応した専用服ではなく、障害のある人から不満や不便さを学び、その対応を持った一般商品としての開発研究を目的とする。義足や車椅子を使用している人の要望を反映し、独自のアーカイブ資料を基にデザイン設計を行った。試着修正を行いファッションショーにおいて着装観察を行った。その結果、年齢や体型の違いに対応可能な衣服の提案ができた。また、車椅子に対応した機能は、誰にでも着用できる衣服となった。機能美を実現することで多くの人に手に取ってもらえる可能性があることがわかった。デザイン設計を均一化することで価格をおさえ、誰もが楽しめる衣服になると考える。

研究の基礎段階は、学生と共に行っている。チームでコミュニケーションをはかり問題解決・課題に対する提案を行い主体的な学びを実践している。多くの方々とのかかわりによって教育効果も大きいと思われる。

## 1. 目的

日本のアパレル業界では、一般的には標準サイズの美しさに重点が置かれ、欧米のようなサイズ展開の対応に至っていない。また、身体に障害のある人が欲しい衣服が手に入らない現状が挙げられる。衣服の設計・デザインは、体型への対応が様々かつ複雑で均一化されたデザインが難しい。

本研究では、身体に障害をもつ人も、おしゃれを楽しむための衣服設計の開発研究を行うことで、誰もが装いを楽しめるデザイン提案になると考えた。一人ひとりのあるがままの身体を受け入れ、個性に合った様々な美のバリエーションを均一化しながら個々のニーズに対応するという、今までに実現していないデザイン設計の提案を行った。

同時に、飾育としての教育効果についても検証した。

## 2. 方法

義足や車椅子を使用する人の衣服設計を進めるにあたり、20歳代から50歳代の5名のモデルの方にアンケート調査を行い、要望を反映しながらデザイン設計を行った。サンプルは、独自の研究データおよび5年間の授業のアーカイブ資料<sup>[1]-[4]</sup>を基に作成した。研究の基礎部分は飾育の実践として学生と共に実践をし、埼玉県総合リハビリテーションセンターの協力を得て、試作段階で意見交換を行った。

安全・着やすさなどで加えた機能が美しいかど

うかを検証し、誰もが着用できるユニバーサルファッションになり得たかを着装観察およびアンケート調査で明らかにする。

サンプル作成後、次のステージではパタンナーの協力を得て商品開発への検討を行った。

### 3. 結果

#### 1) 設計・デザイン (図1)



図1. 企画デザイン  
リーフレットより

#### 20歳代 短下肢装具, 杖使用

多様な組み合わせで気軽におしゃれを楽しめ、着脱のしやすさを考慮したデザイン設計を行った。また、右手に麻痺があるため衿のホックは、左右でかけやすさを検討した。装具や杖にも装飾をほどこし簡単におしゃれを楽しめる提案をした。

#### 30歳代 股義足使用

3名の体型の差をカバーするワンサイズの上下別のデザイン設計を行った。平面性の特長を活かした上衣やウエスト部分を工夫したスカートなど、自由な組み合わせで好みを実現することができた。また、股義足のソケット(体の一部を収納する部分)は骨盤部分を覆った義足で、硬い樹脂でできているため、義足の形状が見えないようにカバーしたデザインとなった。

#### 50歳代 車椅子使用

車椅子に座っている時にも体を締め付けない楽で安全なロングドレスのデザイン設計を行った。ウエスト切り替えは胸下にして、後ろ身頃を上下に分けることで問題を解決した。また、ボタンとボタンホール仕掛け<sup>1)</sup>を使用して安全でデザイン性のあるドレスになった。

#### 2) 着装およびプレゼンテーション

ファッションショーのテーマは『YES』(図2)。5名のモデルの皆さんは、義足や装具、車椅子を日常的に使用しているために、「普段はあまり、本当に着たいものを着られない」という声があった。そこで「あなたは着たい服を着ていますか? その服に満足していますか?」に対して「『YES』と気軽に答えられるような服をつくること」をテーマにかかげた。自分が本当に着たい、こうありたいと思う服を着る。その服を着ることで新しい自分に出会える。そんなユニバーサルファッションを提案した(図3)。

ファッションショーの来場者は約600名であった。2社の新聞社に事前に掲載され、1社は当日の様子も記事になった。



図2. ファッションショーのテーマ



図3. 11月9日ファッションショーを終えて  
モデルさんと学生たち

#### モデルさんの感想

- ・ウエストに義足の装具があたりコンプレックスだったが、カバーされていてとても良かった。
- ・洋服で気持ちがとてもあがった。洋服の力ってすごいと思った。
- ・黒い服ばかり着たり隠したりしてしまうので、ピンクの服を着ることができて良かった。

- ・平面の布の工夫が良かった。
- ・障害を持つ人やファッションに困っていることを一般の人に気づいてもらえる機会だと思った。
- ・服を着て、自分が出ていたと思った。
- ・病が重い方でも自分が見いだせるようなファッションを今後も提案して作ってほしい。
- ・服はかわいくて着心地も良かった。

来場者のアンケート（68件）結果、記述欄の感想・意見の一部を抜粋する。

- ・ショーの構成がよかった
- ・すばらしかった
- ・来年も拝見したいと思います。職員の方々も、モデルさんもお手伝いされる方々も、友達も皆喜々として笑顔が素敵でした。SPTも格好良かったです。
- ・みんな堂々と服をきていてかっこう良かったです。好きな服を着ることはとてもいいと思いました。
- ・モデルの皆さんも楽しそうにキラキラした表情で見ていてとても楽しかったです。
- ・照明がなかったことがとても残念です、次回は是非
- ・全体的にステキなファッションでした。
- ・感動しました！
- ・もっとカラーがあってもいいのでは。
- ・是非、こんなドレスきて結婚式とかに出してほしい、足が見えているのが逆にすごくすてき。
- ・地味になりがちなイベントに女子大生と一緒に参加してくださると、こんなに楽しく華やかになるんだなあー。
- ・商品化できたら素敵だなと思いました。
- ・学生とのコラボはとても良かったです。
- ・立ち止まりの時間が短い。写真をとりたいので長く立ってほしかった。また、来年も是非開いてください
- ・皆、アクセサリが似合ってとてもよかった。これからもおしゃれして楽しんで下さい。
- ・モデルさん達の笑顔が全てを語っている素敵なショーでした。素晴らしい試みだと思います。
- ・障害者の方がキラキラと輝いていて、とても感動しました。良い企画ですね
- ・たいへん参考になりました。ありがとうございました。
- ・皆さんが生き生きとした表情で元気をもらいました。服も本人にとっても似合っていて、色々な工

夫をしている事に感心しました。今度は男性の服も見たいです。楽しかったです。

- ・今後も継続していただきたい。
- ・学生と患者さんが協同して楽しんで行っていると感じられました。
- ・来年のセンターまつり☆ファッションショー楽しみにして居ります。大妻女子大学大綱創成工房、頑張っって障害者の方のサポートよろしくね。
- ・どれもとてもステキでした。皆さん自分に自信がもてる服を着ていて、輝いて見えました。こちらの服が恥ずかしいくらいです。感動してしまいました。

### 3) 教育効果

学生17名には、プレゼンテーションを終えて2回の振り返りアンケートを行っている。年度末アンケートの一部を抜粋する。

- ・障害がある人のための服ではなく、誰もが着用できる服を考え作ることができて良かった。
- ・みんなでいろいろなアイデアを出して、それをまとめて服を作ることができたと思う。
- ・モデルさんの好みや動作に対する機能を考えた作品ができたと思う。
- ・ユニバーサルファッションについて、あまり商品化されていないことがわかり、今後はどの年齢の人でも着られるようなデザインができると良いと思った。
- ・ユニバーサルという本来の意味を考え、誰もが着用できる服にするため改善点を考えたことが良かった。普段何の問題も感じないことに問題があると気づけた。
- ・完成した作品をさらに発展させるために何が必要なか検討することが今後の課題であると思った。



図4. 1月17日、創成工房年度末発表 学内展示

#### 4. 考察

##### ユニバーサルファッションとしての可能性 (図5)

デザイン設計した衣服は、年齢や体型の違いに対応可能であることが着装観察およびファッションショーで確認することができた。車椅子に対応した機能は、誰にでも着用できる衣服となり、その機能が美しいものであれば多くの人に手に取ってもらえる可能性があることがわかった。デザイン設計を均一化することで価格をおさえ、誰もが楽しめる衣服になると考える。また、衣服の役割として、こころを支える効果についても明らかになった。



図5. 3月29日 さくらフェスティバル  
大妻女子大学にて

飾育としての効果は、従来の成果<sup>4)</sup>に加えてモデルさんや外部機関とのかかわりによって教育的な効果が大きいと思われる。障害に対応したデザイン設計の提案は、多様なニーズを包括した一般向け商品としての可能性があり、開発の一助となることを期待している。また、身体の障害に対応する衣服は、個別衣服の改良・リフォームにより問題点を解決することが多く、市場にニーズが届かない場合も少なくない。引き続き、障害のある人から不満や不便さを学び、その対応を持った一般商品としての開発研究を進め、どこまで衣服の均一化ができるか、また、個別対応のデータも加えて整理し、ユニバーサルファッションの体系的な資料を作成したいと思う。

##### 成果発表

平成26年5月17・18日に開催された第15回服飾文化学会大会にて、口頭発表および展示発表を行った。作品展示については、審査を通過し、同学会誌〈作品編〉第7号に掲載予定である。

##### 謝辞

埼玉県総合リハビリテーションセンターのファッションショーを実施するにあたり、モデルの方々をはじめ、ヘア・メイクを担当いただきました国際文化理容美容専門学校の先生方、ビーズステッチサロンセツ、株式会社リブート、有限会社クリエーション、オットーボックジャパン、リハビリテーションセンターの職員の方々、ご協力をいただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

##### 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(K088)の助成を受けたものである。

##### 注・引用文献

- [1]大網美代子. パーツの再構築—装飾の可能性—. 服飾文化学会誌〈作品編〉. 2012, Vol.3 No.1, P.23-28
- [2]大網美代子. ヴィオネとコムデギャルソンのほごまで. 服飾文化学会誌〈作品編〉. 2013, Vol.6 No.1, P.1-7
- [3]大網美代子. 飾育への取り組みとその構築—教育現場の実習教材として—. 大妻女子大学家政系研究紀要. 2011, 第48号, P.57-65
- [4]大網美代子, 野田萌子. 飾育への取り組み—問題解決を視点としたデザイン制作—. 大妻女子大学家政系研究紀要. 2012, 第49号, P.1-10



---

**Abstract**

---

This research is not special clothes corresponding to the physical difficulty, but discontent and inconvenience are learned from the person with the difficulty, and it is developed as a general product which has that correspondence. The request of the person using an artificial leg and wheelchair was reflected, and design was designed based on the individual materials, and fitting observation was done. As for the clothes, it became clear that it could cope with an age and a difference in the figure. I can have many people take it in my hand possibility if a function corresponding to the wheelchair is the design that anyone can put it on and function is beautiful. It becomes a fashion by making design uniformity, and it is [the clothes which who restrains a price can enjoy, too,]. A stage of foundation of the research goes with the student. Independent learning is practiced, and it thinks that effect on education is big in addition to the communication the team, too, by the relations with many people.

---

(受付日：2014年6月15日，受理日：2014年6月24日)

大網 美代子（おおあみ みよこ）

現職：大妻女子大学家政学部被服学科専任講師

大妻女子大学大学院家政学研究科被服学専攻修士課程修了。

専門は被服意匠学・構成学・服飾美学。現在は、服飾研究をベースにユニバーサルファッションの開発研究や問題解決を視点としたデザイン制作を通して、服飾デザイン教育の主体的な学びの構築を模索している。

主な研究：明治期の洋装導入期における復元・研究および修復，造形表現の可能性についての研究および飾育の実践，西洋と日本の服飾文化に関する比較研究や装うことの美意識・美学を探るなど。